

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

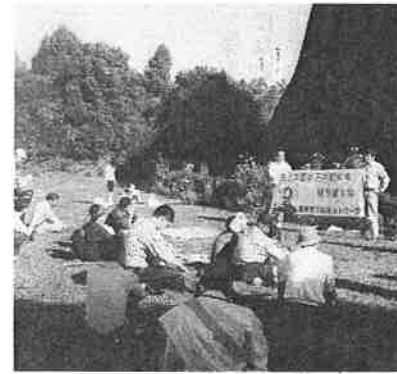
先日、第五福竜丸展示館の事務局の方から興味深い話を伺った。話というのは、いろいろな県から修学旅行の生徒たちが展示館を訪れるというそれ自体嬉しい話であり、その生徒たちは福竜丸の実物を見、話を聞くうちに多くの質問をするようになり、「船はいまわれわれに何を語っているか」を課題とするに至ったという話であった。

百聞は一見に如かず、だが

稲葉 喜久子

私が興味深く聞いたのは、その生徒たちが福竜丸を見るコースを選択するのに、始めは厭やいやだったらしいという点であった。また、そうした生徒の反応は先刻承知でコースを設定した教師だか生徒だかについても興味を持たされた。

私は、若者たちがえてして示す戦争の話への拒否反応を、健康な反応だと思っている。だが一方、戦後生まれの人びとによる十五年戦争についての追体験の作業が、ここへ来てぐんと幅広く進んでいるような気がしている。追体験といえは、戦争のさなかに生まれ、あいにくなことに東京大空襲や学童疎開などの体験をした私も、私の人生、何だったのか、こうなったのはナインデカを識るためには、記録や小説、歴史文献を読んだり、話を聞いたりして追体験するしか方法がない。



十月十五日、江東区夢の島の第五福竜丸展示館前で「キノコ雲の下の悲劇を繰り返すな下町行動」が開かれた。フランス・中国の核実験に抗議し、「脱原発下町ネットワーク」が主催したものである。東京大空襲の被害のもっとも激しかった下町では、この間、平和運動として、さまざまな団体・個人が東京大空襲を語り継いできたが、一九七二年に、下町の七つの地区労と市民、生協、宗教者、文化人、超党派の各級議員五百名が賛同し活動を開始した「再び許すな東京大空襲！反戦平和の集い」もその一つであった。

下町は核実験を決して容認しない

脱原発下町ネットワーク

「脱原発下町ネットワーク」は、一九八六年四月、チェルノブイリ原発事故の直後に、地元から原発汚染をなくそうと、「下町反戦」のメンバーを母体にスタートした。そして、脱原発法の制定運動を皮切りに、チェルノブイリ被災児童救援にウクライナ共和国キエフの児童を招き、その後、下町からの訪問団を派遣し、現在は、医療品送付の第三次カンパ運動を行なって、国内外の被ばく廃絶にとり組んでいる。

石又七さんを迎えることとした。集会当日、第五福竜丸はどっしりと座っている。見上げる船は想像力をかきたてる。木造船の重量感が見る者を圧倒する。一転船上を臨めば、沈着な無線長久保山愛吉さんをはじめ二十三名の乗組員の姿が、大石さんの語り口から伝わってくる。この甲板上でかつてあったであろう生き生きとした海の男のくらしが浮かぶ。

十月、百団体余来館
中国・フランスの核実験に抗議する世論の高まりの中、あらためて核問題を考え、第五福竜丸事件の意義を語り合おうと、地域の平和団体、サークルの小グループの見学が続きました。十月の来館団体はおよそ百団体。JR東日本労働組合は毎月の見学会を何回も行い、神奈川・埼玉県の地域生協の平和グループは連日の見学会を持ちました。展示館前の広場で「核実験ストップ」の集会を開き、近くの団地までデモ行進を行なった会もありました。

核兵器と科学者

原爆開発の教訓

— 理性の敵、恐怖と機密と単純な情熱 —

小川 岩 雄

連載 11

原爆開発に参加した英米、とくに米国の科学者の痛切な体験は、私たちに多くの貴重な教訓を残した。

その第一は、恐怖は人を盲目にする、ということである。亡命科学者たちはナチス支配の恐怖を身をもって体験してきたばかりでなく、原子物理学の分野でドイツが当時第一級の先進国であることを知りぬいていた。そのドイツで核分裂が発見されたとなれば、ドイツはきつと原爆を作り上げるに違いない、とアインシュタインまでが考えたのも無理もないと思われる。

その判断が科学者たちの恐怖を倍加させ、ドイツの国力や国内科学者たちの熱意などの冷静な分析を欠いたまま、盲目的な原爆開発に走らせてしまったようだ。

しかし、ドイツの敗北が確実になつてから、米国の調査団がドイツ国内を詳しく調べたところ、核

開発はほとんど進んでおらず、原爆など到底作れる状況にはないことが分かった。実際、引き続き空爆などで工業力は地に落ち、多数の優秀なユダヤ系科学者が国外に亡命し、残った科学者も多くは内心独裁政権の原爆保有には乗り気でなかったため、ドイツは早々に原爆製造を断念していたのであった。

米国の滞在中のボーアはこの事情を一九四四年頃には察知していたが、突進する米国の核開発を止めることはできなかった。

戦後の米ソ間の軍備競争も、相手の優位に対する恐怖が双方を盲目的な軍備増強に駆り立てた結果であった。今日でも時おり、近隣諸国の軍備増強やその疑惑を脅威と叫んで国民の恐怖をあおり、自国の軍拡の口実とする傾向が見られるが、恐怖が理性を曇らせ、判断を誤らせる恐れが少なくない。

第二は、秘密研究も判断力を鈍らせる、ということである。軍事

的 な 研 究 開 発 は 秘 密 に 進 め ら れ る の が 普 通 だ が、原爆開発ではとりわけ嚴重な秘密の下で行われた。

ロスアラモス、オークリッジなどの研究所やウラン濃縮、プルトニウム生産などの諸施設は、人里離れた辺境に分散して作られ、研究者や作業員は細かく分断され、互いに仕事の話しをすることさえ許されない。外部からの情報も遮断され、例えばドイツや日本との戦況などほとんど知らされないまま、担当の作業だけに黙々と専念させられる。

これでは、自分の作業の意味も分らず、研究開発の能率も上がらず、まして軍事的・戦略的な選択について科学者としての判断や発言などできるはずがない。こうして結局多数の科学者の当初からの意図に反して日本に原爆が投下され、彼らは心ならずも大量殺傷に加担した結果となつてしまった。

第三は、学問的興味や技術的功名心だけに溺れるな、という警告である。真理探求への情熱や競争心、技術的難題への挑戦などは、確かに科学技術の進歩発展を支える原動力ではある。しかし原爆開発に参加した科学者の多くは、自分の研究の位置付けや社会的影響

などについて必ずしも十分には考察せず、「ナチスの原爆に対抗する」という大義名分だけに安住して、先端的技術開発に情熱を燃やし、研究に専念した。

その結果、研究者全体として核兵器という途方もない「鬼子」を生み出してしまった。優秀でまじめな努力家や研究のことしか考えない「専門ばか」の恐ろしさを、私たちは先のオウム事件でも思い知らされたのではなからうか。

第四の教訓は、単純素朴な「正義感」や愛国心の危険性である。ナチスやファシストの迫害を逃れて亡命してきた科学者たちが、自分たちを暖かく受け入れてくれた米国の深く感謝し、第二の母国として過大な幻想を抱いたとしても不思議はない。その「素晴らしき国」への深い愛国心や尊敬が、彼らの自発的な献身を促したことは確かであろう。

しかし、理想的な国家権力など当時あるはずがないという厳しい現実を、科学者たちは充分認識しておらず、完成した原爆の引き金は結局彼らの手から引き離され、ソ連に対抗する「力の政策」の手段にされてしまったのである。

(立教大学名誉教授・協会理事)

夢の島と第五福竜丸

細野 一 雄

第五福竜丸展示館見学は何回めになるだろうか？ 最初の頃は、地下鉄東陽町駅で降り、バスに乗っていった。今は新木場駅が開発されて便利になった。

展示館前の水面も、様変わりして、ヨットハーバーになっているのには驚かされた。以前は貯木場

だったと思うが……。吹いて来る風も、海の臭いから、海の香りに変わったような気がする。

「豊島区立千早図書館友の会」で、史跡散歩を始めたのが昭和五年で、都内・近県の史跡を尋ねて勉強を重ねてきた。今回は身近にあって意外と気が付かない「夢

の島」をテーマに勉強した。

昭和十四年東京飛行場用地として埋立てが進められ終戦で公園整備となり、都の江東清掃工場が建設されて、ゴミ処理から生まれる熱エネルギーが、総合体育館・熱帯植物館等に活用されている事。そして第五福竜丸を尋ね、被災はもろろんそれ以外の点についても考えてみた。

昭和二十一年、占領下、百屯以上の船は建造不可のもとで、何とかして一屯でも大きい船を造り、漁獲高を増やす努力をして、この船

が造られたと思う。

当時は冷凍設備が無く、氷を積んで、約二ヶ月間程の遠洋漁業であった事。

操業に従事する二三人の人々の厳しい生活環境の中で、一匹でも多くの魚を獲るため並々でない労働であったろう。

船の歴史というか、この船は昭和二年「第七事代丸」として三崎港に配され、二八年「第五福竜丸」となり焼津港に、二九年三月一日被災、同年研究調査のため文部省買上げ、その後水産大学所属の「はやぶさ丸」となり、四二年廃船になり解体業者に払下げ、船にもそれぞれ歴史があることを知る。

水上に浮かぶ船も、陸上でその全容を眺めるとは全く異なるものであり、「こんなにも大きいのか」が実感。唯々驚きであった。そして、もうこんな船はできないだろうと思った。材料・船大工さん等々の点から「木造船技術」の上からも大切に保存すべきだと感じた。

夢の島の歴史から始めて、第五福竜丸まで、意外と気付かなかつた点が発見できるのではないかと思われる一日だった。

(豊島区立千早図書館友の会幹事)

みんなで考えた「核」の研究発表

切り絵で作られた色鮮やかな原子雲の案内板「わすれないで、太陽が二つであの瞬間を」十月九・十日開かれた神奈川学園中学校の文化祭に二年D組が取り組んだ研究発表で、テーマは「核」。

教室いっぱい、核分裂はどうして起こるかからはじまって、核開発の歴史、広島・長崎の被爆、第五福竜丸事件、被実験被害の実相等々がパネル写真、解説、図版、模型、を駆使して生き生きと表現

されました。第五福竜丸展示館からも組写真、ポスター、ガイガーカウンター等を借り、何回も展示館にかよって調べた成果も克明に展示されました。大石又七さん、反核写真運動の松本栄一さんの講演会も計画し、四二名のクラス全員が四ヶ月も「やっぱり伝えなきゃ」と気持ちをついにとりくんだ」発表は努力賞を獲得しました。

十一月十五日には、一年生全員が展示館を見学する予定です。